

【海外留学レポート】

トルコ人と日本人の知識量の差に関する一考察

－トルコ留学時のダイアリーから－

A Study on the Difference between Turkish and Japanese in Terms of their Volume of Knowledge: From a Diary Written Whilst Studying in Turkey

中央大学総合政策学部 3年 高山 桜笑

TAKAYAMA Sae

(3rd year student in the Faculty of Policy Studies, Chuo University)

キーワード：トルコと日本、知識量の差、アンカラ、中東工科大学

1. はじめに

「トルコ」という国名を聞いて何を思い浮かべるだろうか。

私の場合、滞在する前はドネルケバブ（回転させて作るロースト肉）の印象が一番強かった。しかし生活してみるとドネルケバブ以外にも美味しいトルコ料理は数えきれないほどあり、料理だけでなくオスマン帝国に代表されるような素晴らしい歴史や文化を持っている国だと分かった。

2019年9月から2020年1月にかけて、私はトルコの首都アンカラにある中東工科大学に留学した。そこでの日々の生活や友人との関わりを通して、トルコ人が日本や日本文化に対して持つ知識と、日本人がトルコ、トルコ文化に対して持つ知識の量に、かなりの差があることに気が付いた。日本へ帰国した今、留学経験を振り返る中で、改めて、その知識量の差について検討してみたい。その衝動に駆られたことが、本レポート執筆のきっかけになっている。

2. 問題の背景と本論の目的

2012年に外務省が実施した「トルコにおける対日世論調査」によると、日本に関心のあるトルコ人は過半数を超え、8割を超える人々がトルコと日本は友好関係にあると答えている¹。2011年10月、

¹ 外務省 HP https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/24/5/0522_01.html (2020.1.19 閲覧)

11月に起きたトルコ東部地震での被災者に対する支援を行っていた日本人が亡くなったことが、日本に対する印象を良い方向へ変える大きなきっかけとなったようだ。約7か月前の東日本大震災が起きた際にはトルコ人も日本で行方不明者の搜索活動を行っていた。これは1999年のトルコ西部地震での日本の支援に対する恩返しという意味合いがあった。

文化交流の面では、日本とトルコの友好関係が始まるきっかけとなった1890年のエルトゥール号遭難事件（和歌山県沖で遭難したトルコの軍艦の乗組員たちを、大島村民が生存者の保護や遺体収容などの支援に関わった出来事）から120年目の2010年、節目としてトルコで日本年と題した交流事業が行われ、この試みによりトルコ全土で186の交流事業が催された。また日本でも、2019年はトルコ年としてトルコ至宝展などの催しが全国で行われた。前述の外務省調査によると、トルコ人は科学技術に次いで日本の文化・芸術に関心があるそうだ。トルコの日本語学習者数も2500人と中東地域で最も多く、日本語学習の動機としては「日本語という言語そのものに興味があるから」「アニメ・マンガ・J-POP・ファッション等の日本の文化に興味があるから」がそれぞれ約85%を占めている²。

また、科学技術の面でも、トルコの自動車産業において日本の自動車メーカーであるトヨタは4番目のシェアを占めており、1970年代よりトルコ第3の都市イズミルの工場が生産が行われていることから（小林2006）、日本とトルコは工業面でのつながりも強いことがわかる。一方、やや古いデータではあるが、寺阪（1997）による日本人のトルコへのイメージ調査において、トルコ国旗の主な色を正解したのは半数以下であった。このことは、日本人のトルコに関する知識が浅いことを表している。



写真1 中東工科大学の記念碑の前で

そこで本レポートでは、トルコ留学中、私が日本 - トルコ間のつながりに関して、国際交流の側面から気づいたことを報告することを目的とする。そのうえで、交流促進に向けた課題を明らかにすることを試みる。

² 2018年度国際交流基金海外日本語教育機関調査参照。

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/turkey.html> (2020.4.1閲覧)

3. 調査概要

調査では、私が留学中につけていたダイアリー（2019年9月19日～2020年1月16日）を扱う。具体的には、今回のテーマである日本 - トルコ間の国際交流における知識量の差に関係する部分を一部抜粋したものをデータとし、「留学ダイアリー1～11」として斜体で示す。

4. 調査結果

留学ダイアリー1

2019年9月19日

中央大学からの留学生4人とタクシーに乗った。運転手のおじさんが愉快的な方で、どこから来たか聞かれたので日本と答えると「ながとも」、「しんじかがわ」や「とうきょう」など日本についての知識を披露してくれた。

日本について良いイメージを持ってきていることがありがたかった。

留学ダイアリー2

2019年10月1日

大学内の日本文化クラブに所属している学生に授業後声をかけられたため、初回ミーティングに参加した。ミーティングは大教室で行われたが、ほとんどの席が埋まるくらいたくさんの生徒が参加していて、日本文化へ興味を持っている学生が想像以上にたくさんいることに驚いた。活動内容としては日本語学習や将棋を行っているようだ。

留学ダイアリー3

2019年10月9日

1日に日本文化クラブのミーティングに誘ってくれた友人と話す機会があった。彼に日本に興味を持った理由を聞くと、女子バレーボールが強いからだと言っていた。今まで、外国人の日本に興味を持つきっかけは、アニメや漫画ばかりだと思っていたので、意外だった。後で調べてみたところ、日本のプロチームにトルコ人プレーヤーがいることが分かった。

また日本にいたときのトルコのイメージはどうだったか聞かれた時に、私は留学が決まる前も実際訪れた後も「トルコ」という国に対して好感は持っていたが、特別な感情を抱いたことがなかったため返答に困った。

留学ダイアリー4

2019年10月10日

英語の授業で休憩時間に隣に座っていた学生に話しかけられた。彼女は日本や韓国の音楽が好きだと言っていて、昨年大学内の日本文化クラブに日本語を習いに行っていたそうだ。彼女はひらがな、カタカナ、漢字を覚えることが難しく1年で通うことをやめてしまったそうだが、いくつか覚えている日本語を教えてくれた。完璧な日本語を知らなくても、コミュニケーションのきっかけとなるため、相手の言葉を少しでも知っているかどうかの差は大きいと思った。

留学ダイアリー5

2019年10月14日

クラスメイトに留学生にインタビューする課題があるため手伝ってほしいと頼まれ、授業後に30分ほど話した。お互いにおすすめのトルコ料理や日本料理を教えあった。彼女の友人は寿司が大好きで、誕生日パーティーは必ずクイックチャイナ（寿司を提供しているレストラン）で行っていると言っていた。私は寿司が好きではないのでそのことを伝えると「本当に日本人なの？」と言われた。彼女には日本＝寿司のイメージが根付いているのだと感じた。

留学ダイアリー6

2019年10月21日

英語の授業でプレゼンテーションの練習を行った。トピックは理想のリーダー像についてで、あるクラスメイトはトヨタ自動車の創業者について話していた。トルコではトヨタをはじめとして日産やホンダなどの日本車を見るが多いため、トルコ人にとって身近な存在であるのだと感じた。また休み時間に彼と話したときに今学期から第2外国語として日本語を習い始めたと言っていて、黒板に「すし」と書いてくれたが、「す」を書くときに数字の9を最初に書きそこから他の部分をつけ足していたり、「し」が左右反転していたりしていた。日本語を習得するうえでひらがなは不可欠だが同時に最初の難関でもあるのだと感じた。

留学ダイアリー7

2019年10月24日

英語の授業でプレゼンテーションを行った。トピックは21日に行った練習と同じ理想のリーダー像についてだった。前回トヨタの創業者についてプレゼンテーションを行った学生とは別の学生が宮崎駿について話していた。前日に引き続き日本人について話している学生がいたことに驚くとともに、日本文化がトルコに浸透していることをうれしく感じた。

留学ダイアリー8

2019年11月17日

台湾からの留学生の友人とコンヤ（トルコ中南部に位置する町、メヴラーナ教発祥の地）へ日帰り旅行をした。観光客があまり多くなかったため、東アジア人2人が歩いているととても目立つのか「謝謝」や「こんにちは」などすれ違いざまに話しかけてくる人もいた。コンヤに限らずトルコ国内を旅行していると写真を一緒にとってほしいと頼まれることが多い。時には何も言わずに近寄ってきてツーショット写真を撮り無言で去っていく人もいる。最初はすごく驚いたが、最近では慣れてきた。

留学ダイアリー9

2019年11月28日

台湾からの留学生の友人に一人のトルコ人学生を紹介された。彼は日本の大学院進学を検討していると言っていて、日本に興味があると言っていた。日本を訪れたことはないと言っていたが、鬼瓦とシーサーがモチーフの2つのタトゥーを腕に入れていて日本への愛を感じた。トルコで強く感じることは距離的に近くもない国であり、訪れたこともない日本という国や文化をなぜそこまで好きになってくれるのかという疑問だ。私はトルコが好きだが、留学が始まる前まではトルコがどういう国なのかというイメージもなかった。日本の文化が世界に広まっていることは素晴らしいと思うが、私を含め多くの日本人がトルコに着いてほとんど何も知らないことを申し訳なく感じた。

留学ダイアリー10

2019年12月7日

アンカラの土日基金（国際交流基金 土日基金文化センター）を訪問し、毎週末行われている日本語教室を見学した。私が見学したクラスは初級で、教材は『まるごと』を使用し、生徒は7人だった。授業が始まると、想像していたよりも生徒の皆さんが日本語を流ちょうに話していたため驚いた。休み時間に廊下へ出てみると他のレベルの生徒もいて、たくさんのトルコ人が日本語を学んでいることが嬉しかった。初級クラスにいたある生徒になぜ日本語を勉強し始めたのか質問したところ、彼女は建築を大学で学んでいて、日本の伝統的な建造物が好きで日本に興味を持ったと言っていた。昨年東京を訪れたとも言っていた。私は今後とも日本語の勉強を続けてまた日本に来てほしいと思った。その後大学に戻って、クラスメイトと彼女の友人たちとカフェで話した。初めて会う人も何人かいたが、日本について興味津々で日本についてたくさんの質問をされた。しかし日本への渡航費は学生にとっては高いため、働き始めてからいけたらいいなと言っていた。

留学ダイアリー11

2020年1月16日

イスタンブール空港から出国した。出国審査官にパスポートを差し出したところ、私が日本人だと分かるやいなや「スシ!」と言ってきた。その後私がトルコの大学に留学していて少しだけトルコ語を理解できると分かると「なんでトルコを留学先として選んだの?」や「Görüşürüz (トルコ語でまたね) は日本語で何ていうの?」と聞かれた。「またね」という言葉を教えると去り際に私に対して言ってくれた。旅先で言葉は通じなくても最終的にはどうにかなったり、現地の人とボディランゲージでコミュニケーションを取れたりすることも多いが、やはり言葉を少しでも知っていれば会話のきっかけとなり、より親密になれるのは確かだ。特にトルコは英語を話せる人がヨーロッパの国ほど多くはないため、この留学期間はトルコ語に助けられた。



写真2 トルコの友人たちと

5. 考察

両国が友好関係を長い間友好関係を築いてきたことは紛れもない事実である。しかし、日本における震災後の復興支援は日本社会の混乱もあったためか、日本ではトルコについて一般には知られていないように思われる。そのため両国が定期的に文化交流を行い、友好関係の維持に努めていることも見て取れる。さらに科学技術の面でも日本企業の進出により経済的なつながりが強まっていることがわかる。

しかし、全体的にみて国と国同士のつながりは強いが、人と人同士のつながりが弱いのではないだろうか。例えば日本人にトルコ語の挨拶表現やサブカルチャー、代表的なトルコ企業について尋ねて

も、思い浮かぶ人は少ないと思うからだ。トルコ国内は日本車やその他の工業製品が日常的に近くにあるため、興味や関心を持ちやすい環境となっているが、日本ではトルコ製品が身近にないため関心を持つ人が少ないのではないだろうか。本論文のデータとして挙げたダイアリーの記述にも挙げられ、また私自身も感じたように、国際交流とは言っているものの、日本人が与えてトルコ人が受け取るという関係性が出来上がっているように思う。日本語を勉強しているトルコ人と同じ数だけ日本人もトルコ語を勉強するべきと言いたいわけではないが、もう少し興味を持ってもらいたいのではないか。トルコだけに限らず日本語学習者の多い東南アジア諸国に対して新興国だからという理由で距離を置いてしまう人が多いと思う。現在の国際交流、特に日本語教育や国際協力は一方向に働いているものが多く、与える側と受け取る側のギャップが大きい点が問題だと考える。

6. おわりに

今回のレポートを記すにあたって、留学中に感じたトルコ人と日本人のお互いの国に対する知識量の差について改めて考える機会となった。両国は長い間良い関係を保ち続けているにも関わらず、民間レベルのつながりが弱いことがその問題につながっていることが分かった。日本のニュースはアメリカや西ヨーロッパ諸国など、どうしても日本に影響力が大きい国に関する話題を取り上げる傾向にあるため、与えられた情報だけでは偏った知識しか身に付けることができない。本当の意味での国際交流を行うためには、ステレオタイプにとらわれず、自らの頭で考え、ただ与えるのではなく相手から学ぼうとする意識が大切なのではないだろうか。

留学を通じて感じたそれらの問いを検討しつつ、引き続き日本とトルコ、あるいは日本と他の国々との関係を追っていくことを今後の課題としたい。

参考文献

小林浩治（2006）「トルコの自動車産業と泳他の事業進出」『赤門マネジメント・レビュー』5巻7号， pp. 483 - 500.

寺阪昭信（1997）「日本人のトルコへのイメージ」『流通経済大学論集』31（3）， pp. 93 - 99.